発行所
三池炭鉱労仂組合
大牟田市不知火町2
電話③3033番
③3034番
編集兼発行人 山下 開
年間600円 送料共

歴史の正しさは、不正との闘いの中にしか実現されない。

CO家族の手記
いのちある限り……

古閑久代

夫が熊大へ入院したのは、昭和三十九年の五月であった。早くよくなるために入院させたのであったから、夫のいない淋しさも不自由さも我慢した。だから月に一回の外泊が待ち遠しかった。一酸化炭素中毒がどんなに恐ろしいものであるか、まだこのころはよく知ってもいなかったから。

何ということだろうか

それがなんということだろう。一酸化炭素中毒は立派な成人男子を破壊したばかりではなく、夫婦のいとなみも、その家庭も心も破壊しようとする。私たち夫婦がそのいい見本かも知れない。だが私は必死にふんばってみた。CO患者となった夫にはなんの罪もない。たとえ体がかなわなくなったとしてもそれは夫の故ではない。これはどんなことがあっても、忘れまい。

そして憎しみや怒りはすべて会社へ、三井鉱山殿へ進呈しよう。

労仂者だからといって、仂くだけ仂かせ、その上毒ガスまで吸わせて、私たちのささやかな家庭のしあわせまで奪おうという三井の奴等へ。

ついに夫婦別れの危機が…

何時の間に買いこんでいたのか私の知らないお酒のビンがつぎつぎと空になってゆく。私はそれを居ても立ってもおれない思いでじいっと眺めているだけ。

八月、外泊で帰った夫は眼のすわるまで呑むのを止めない。「まだ」ともいった。その上「お父さんが酒をのむから別れるというのなら、これからは僕たちがのませないようにするから別れないでも」ともいった。

なんにも罪のない子どもたちになぜこんないやな思いをさせるのかと、私はそのとき思わず涙をこぼした。

なぜ神は男女をつくったか

それからしばらくたって、夫がまた外泊で帰って来る日、夫の外泊を心待ちしながらも、私は夜のことを考えると体中が寒くなるようないやな思いがしてきて、何もしない前から小さく萎縮してしまう自分を、どうすることもできなかった。

そんな私の気持ちなんか考える暇もないように、その夜も夫はなんとか自分の欲情を達しようと必死なのだが、私の体を燃えたたせながら、その夜もまたも最後の極に達することができない。こんなとき女は一体どうやって身を処すべきなのか。なぜ神様は男・女と区別をつけられたのか。どうにもやるせない体をもてあまして、私は泣くより他に方法を知らない。

私が泣いたりしたら、また夫は酒をのんだり怒鳴ったりするのではと思いはしたが、もう後はどうにでもなれ、という気持だった。子供のようにしゃくりあげながら私は夫にいった。

「お父さん、私をこのままでほうっておくの。私は今に狂人になるわよ。私のこんな気持なんかちっともわかってくれないで、私ばっかり怒るけど……私私、そのたんびにお父さんが嫌いになるのがとっても悲しいのよ。それをそれをどうしてわかってくれないの」

もう、打たれてもげられてもいいと思った。

今のいままで思いつめ、何時かはいわねば……と思っていたことを、私は次から次と夫にぶっつけた。

何時とはなしにできた夫婦の間の深いミゾを、今こそ埋めなくては……とただそれだけの思いで。

夫は私の夫に対する態度が冷たいとばかり思いつめているらしいが、それは違う。

三百十三日の大闘争以来、私達は貧しさに耐え、夫は職場で差別に耐え闘って来た。三池労組員であるという事で、周囲の圧迫にも耐えて来た。その上にこんどはこんな恐ろしいことにさえも耐えよと言うのか。

何故? 何故に……

やっぱり闘いが待っていた

そんな十一月のある日、何んという事であろうか夫のもとへ労仂省からの労災補償を打ち切るという冷たいあの通告がやってきた。

私は泣いた。しかしその涙は、会社や政府に対する怒りの涙であり、同時に長い間耐えに耐えて来ている自分の気持を何故かさわやかな思いにさえした。そして泣いているうちに、長い間苦しみと悩みを共にして来た私達夫婦の心にふたたび愛がよみがえって来るのを私は知った。怒りの涙で、心の中に出来ていた恐ろしいミゾが流れ去ったのであろうか。

私達は闘わなければならないのだ。生命のある限り、妻として私は夫をまもり、やっと取りもどした心の安らぎをさらに不動のものにする為にも、私達は闘わなければならない、明日も、あさってもいいえ、それは永遠に!

冷酷な「労災補償打ち切り」の通告を返上した〝CO患者家族の会〟の主婦たちは、絶対に忘れ得ない場所—三川鉱長室にすわりこんだ。(上の写真)

筆者紹介

古閑久代さん(四十五才)のご主人・吉郎さん(四十七才)は、現在熊大病院に入院中である。留守家庭には奥さんの久代さんのほか、二人の子ども(高校生と中学生)が留守をまもっている。

ご主人の吉郎さんは、みんなと約一カ月おくれて十一月の下旬、労災補償の打ち切り通告が出された。

吉郎さんは、被災前までは地域分会長をしていた活動家。住所は荒尾市境崎一〇五七